

大石 汎

日清戦争中の森鷗外

門下社
門下

日清戦争中の森鷗外

● 大石 汎

門土社総合出版

おお いし ひろし
大 石 汎

1939年、石川県金沢市に生まれる。早稲田大学国文科卒。

『大石汎脚本集(高校演劇叢書第六巻)』、『ぼくの百人一首』、『美神と軍神と』(いずれも門土社総合出版刊)などの著書がある。

現住所 横浜市栄区桂町279-2

●日清戦争中の森鷗外

著 者／大 石 汎

編 集 者／山 下 範 子

制 作／同 林 工 房

本文印刷／互惠印刷株式会社

表紙印刷／共 立 美 術

製 本／黒 田 製 本 所

発 行 者／小 澤 紀 子

発 行 所／門土社総合出版株式会社

横浜市戸塚区下倉田町1478番地
〒244 ☎045(864)0244番

発 行 日／平成元年3月31日初版第一刷

定 価／600円

© 1989 Oishi Hiroshi

ISBN 4-89561-093-4

C0295

序

文豪鷗外森林太郎は生涯の大半の期間陸軍軍医の任に在り、明治の二度の大戦に参加した。兵科の将校ではないにしても、専門の軍人として征旅の事に従ったのは我が国近代の文学者中ほとんど唯一の例であろう。小著は日清戦争従軍中の鷗外の行動を各種史料に依って概見したものである。

軍人鷗外の姿は従来あまり顧みられることなく、軍事は鷗外の文人としての才能と矛盾対立するものであるかの様に概括されることが多かった。私は軍人鷗外の残した諸記録のうちにも、文人鷗外の力量が脈々として生動しているのを感じ、軍事は鷗外文学に特有の色合いを添えていると思う。私が興味を覚えるのは、鷗外の裡なる矛盾の隠微な影ではなく、軍事を業とし業余に文事をも為し得た鷗外の姿そのものである。

鷗外の姿を求める私の作業は今後も続く。小著はその作業の現時点に於ける見取り図だ。「百門の大都」にも比せられた大建築群森鷗外の姿を探求する見取り図のひとつとして、読者の一見を願うものである。

なお、本書を成すに当り、陸上自衛隊衛生学校並びに防衛研究所架蔵の史料を極めて自由に閲覧利用することが出来た。当局の方々に感謝し、後世に記録を残した先人に敬意を表する。

一九八九年三月

著者

●日清戦争中の森鷗外／目次

序

◎一頁

一、青銅の時代

◎五頁

二、林アレバ必ず村アリ

◎三十五頁

三、雪の進軍

◎六十七頁

四、椰子の杯

◎九十八頁

参考文献解説

◎百二十九頁

年表

◎百三十三頁

日清戦争戦地概念図

◎百五十頁

詩人とその忠僕——後記にかえて——

◎百五十一頁

一 青銅の時代

明治二十七八年戦役、即ち日清戦争当時日本陸軍の装備していた野砲及山砲は「口径七珊米半青銅砲」だった。日清戦争はいわば軍国日本の青銅器時代に属する事件である。一等軍医正（中佐相当官）として日清戦争に従軍した鷗外森林太郎は時に三十三歳、弱冠と称すべき年齢ではないが「テエベス百門の大都」と仰がれるまでにはまだまだ前途程遠い。文芸上の著作としては「水沫集」一巻があるだけだ。この時代の鷗外の著作で大きな意味を有するのはむしろ文芸書ならぬ「陸軍衛生教程」であろう。青銅器時代にある日本陸軍にとって、それは初めてのまとまった衛生学の教科書だった。日清戦争に従軍した陸軍衛生部員は鷗外漁史の「水沫集」は知らずとも陸軍軍医学校長森林太郎の「陸軍衛生教程」は暗誦できる程読んでいた筈である。明治二十七年八月二十五日鷗外は中路兵站軍医部長に任ぜられ韓国釜山へ赴くことになった。

大君のみことかしこみみいくさに　いて立つ君は勇き哉

外国をめぐり帰りし君が身に　こまもろこしは何ならぬ哉

鷗外の妹喜美子は歌を贈って戦地へ向う兄を励ました。ドイツから帰って六年目兄の二度目の海外勤務地は「とつくに」欧州に比べれば至って近い韓国、清国「こまもろこし」だ。後方の兵站部に在る兄の身に銃火が及ぶことは先ずあるまい。しかし何といつても初めての対外戦争であり相手は大国清である。「何ならぬ哉」と言う一方で妹は兄の無事を祈る。

今よりは朝な夕なにぬかつきて　君やすかれと神に祈らむ

「三十日。終日車中に在り浜松にて朝食し夕に神戸に着す此日第三師団動員す鉄路熱鬧す夜須磨明石を過ぐ駅ごとに燈を点し旗を樹て茶湯を備へて兵の過ぐるを待てり明石には奏樂の準備ありき」。

鷗外の日清戦争従軍記「徂征日記」の行間に九十余年前の人々の歡呼の声が未だに留まっている。軍用列車の通る駅ごとに大敵清国との戦いに対する不安と不安なるが故の人々の興奮とが渦巻いていたのだ。奏楽に送られての「こまもろこし」への出発は尋常の旅立ちではない。思えば鷗外が「とづくに」をめぐったのもこういう日のあることに備えての国家国軍の計画によるものだった。鷗外の「とづくに」での生活記録「独逸日記」を読む人はそこに鷗外の青春のエピソードを探し求め、一種酔えるが如き感興にひたることも少なくないようだが「独逸日記」の末尾の一句「鷄林医事の訳稿を留めて還る」が自ずからその六年後の「鐵路熱鬧」の出征場面につながっていることに気づく人は果して何人あるだろうか。

「鷄林医事」は鷗外の友人小池正直が外務省囑託として釜山に在った時の記録だ。鷗外は在独中にこれを翻訳してベルリンの民族博物館に納めた。「訳稿」は後に「zwei jahre in Korea」と題して出版され現行鷗外全集「独文の諸稿」の中にも収められている。小池正直の原文の方は文芸家でなかった小池正直には全集も無いから、あまり人目に触れることもない伝記「男爵小池正直伝」の中にその書簡や逸文とともに載せられている。「鷄林医事」は全九章の長文で小池正直の代表作と言ってよい。内容は韓国の地誌、氣候に始まり風俗習慣や人種、社会の階層を論じ、服飾住居食物等生活の諸相に触れ、当然「医事」にも言及し、産業経済の現況を概観

する。単に「医事」にとどまらぬ当時の韓国の国勢全般にわたる見取図であり、歴史的な意味では今日読んでも興味の尽きぬ著述だ。鷗外が独文では「在韓二年記」という意味の表題にしたのも原著の内容に合致している。小池正直は陸軍衛生部内有数の韓国通になっていたのだ。り、その著を訳した鷗外も間接的ながらかなりの韓国通になっていたのだ。

小池正直は日清戦争開戦以前に渡韓した第五師団の兵站軍医部長としてすでに仁川に在った。鷗外は釜山へ向う。「鷗林医事」の著者と訳者とは「鷗の林に風立ちて 往来の雲の脚はやし」と当時の軍歌に唱われた日清両軍衝突の地に前後して派遣されたわけだ。——鷗の林——「鷗林」は韓国の古称である。

明治二十七年八月一日日本は清国に対して宣戦布告した。日清両国の戦闘はそれより前に始まっている。参謀本部編纂の「明治廿七八年日清戦史」はその第一巻第七章に「在韓日清両軍ノ接仗」と題して、宣戦布告前に事実上開始されていた日清戦争の記述を始める。「接仗」とは言い得て妙である。中国語で戦争のことを「打仗 *da zhan*」と称する。「仗」は「つえ」ではなく兵器「兵仗」だ。本格的な「打仗」に入る前に日清両国は小ぜり合い「接仗」を始めていたのだ。「勇敢なる喇叭卒」を生んだ成歓の戦闘は七月二十九日まで「接仗」の期間に行なわれた戦いだ。海上では七月二十五日豊島沖（仁川港南西沖合八〇キロ）で清国の増援部隊を載せた

高陞号が東郷平八郎艦長の浪速に撃沈される「接仗」があった。

宣戦前に戦闘を始めたくらいだから当時の日本が清国を一鼓して破るべしと考えていたのかというとは決してそうではない。「接仗」が高じて「打仗」となったのは日本にとっても嘉ぶべきことではない。日本軍の戦争指導機関大本営は清国の兵力、とりわけその海軍力を高く評価しかつ恐れていた。日本海軍の主要軍艦二十八隻に対し清国海軍は総勢八十二隻であったから無理もない。殊に日本海軍の当面する北洋水師は東洋一を誇る定遠、鎮遠の二大装甲艦を有していた。大本営は対清作戦の成否はかかって制海権の獲得にあるとしていた。制海権を獲得した場合場合は海上輸送によって一気に軍を清国領内に進め得るが、十分に敵海軍を制圧できぬ場合は韓半島を通して軍隊を派遣することとし、不幸にして我が海軍が敗れた場合は現在韓国に派遣中の第五師団を支援する一方、国内の防備を固め敵の襲来に備えねばならない。これが大本営の対清戦の見通しだった。日清開戦に際しては東京湾周辺の諸砲台も厳戒態勢に入り湾口には機雷が布設された。時の東京湾要塞司令官牧野毅少将は要塞の備砲が貧弱であるとして大いに心配している。定遠、鎮遠以下北洋水師の諸艦が日本沿海を劫略する場合もあり得ると、大本営は考えていたのである。

鷗外の派遣された「中路兵站部」も清国の海上兵力を警戒する大本営の慎重な作戦計画から

生まれたものだ。明治二十七年八月二十二日大本営兵站總監部から第五師団宛に次の通達が出された。

「第五師団兵站監古川大佐へ

一、在韓野戰軍ノ兵站線路ヲ二区ニ分チ漢江ヲ以テ兩管区ノ境界トス

第一区ハ釜山ヨリ松坡鎮ニ至ル線路ニシテ之ヲ中路兵站線ト称ス

第二区ハ松坡鎮渡場ヨリ起リ野戰軍所在地ニ至ル

二、今後大佐ヲ中路兵站監ト為シ兵站總監ニ直隸セシム須ク第二区即チ第五師団ノ兵站線ト連絡シ其任務ヲ尽スヘシ」。

中路兵站線の設置は日清戦争の兵站業務を統轄した兵站總監川上操六中将与兵站總監部參謀田村怡与造少佐の企画したものだ。中路とは韓国でも通用する呼称で、京城、釜山間の交通路を指し京釜路とも称する。当時の京釜路は一部洛東江の水路利用の便はあるものの道路状態は極めて悪く、対清作戦の兵站線としては遠すぎ効率は悪い。が、もし制海權が失なわれた場合にはここを通るしかあるまい。

ところが中路兵站部が編成された頃第五師団は成歓での「接仗」に勝ち次の目標平壤へと進んでいた。海上の「接仗」も我が海軍の完勝だ。「もし制海権が失なわれたら大変だ」との大本営の危惧をよそに前線では「これはいけそうだ」という気分になっていた。成歓戦の清軍の死傷は五百名以上日本軍の死傷は八十余、しかもそのうち二十名余は所在の安城川の湿地帯に足をとられた溺死だった。海上の戦鬪に至っては日本側の損害は皆無であるのに対し清国側は輸送船高陞号と軍艦操江、広乙を失ない、高陞号に搭乗していて海没した兵士は千三十余に達した。日清戦争全期間の日本軍の戦鬪による死者（即死・傷死）千四百名にほぼ匹敵する兵員を清軍は「接仗」の期間にすでに失なつたのである。

意気揚る第五師団の近くに在つた兵站軍医部長小池正直は八月二十九日石黒忠恵宛の書簡で中路兵站部の成立を評して言う。「古川大佐ハ釜山ヨリ松坡鎮迄ノ兵站監ノ由ニテ第五師団ノ者デハナキ様ナリ妙ノ者トハナリニケリ。今後該線路ニハ左程ノ用モナシ何ヲスル者ニヤト師団長ハ笑ヒナガラ話シ居ラレタリト聞キ又愈妙ナリ」。

中路兵站部は前線の第五師団の補給の為に設けられた兵站専門の機関で、大本営直属の枢要な地位にあるのだ。それが肝腎の第五師団長から——何をするんでしょうね——と笑われるとは全く「妙ノ者」だ。ドイツ留学中鷗外は川上操六中将——当時の川上少将——に会いその識

見に敬服した。また田村怡与造少佐——当時の早川大尉——には「兵事哲学者」クラウゼキッツの兵書を講議した。——両君の発案にしては妙だな——と鷗外も思ったかどうか、ともかく鷗外はいささか不思議な組織の衛生担当官となつて日清戦争に出征したのである。

鷗外に直接命令を下す石黒忠恵野戦衛生長官は兵站總監の隷下にあるのだから「何ヲスル者ニヤ」と言われている中路兵站部へ部下を送らねばならない。大本営野戦衛生長官部編纂の「明治二十七八年戦役陣中日誌」には鷗外に与えた石黒長官の訓示が記されている。

「軍医学校長森一等軍医正林太郎ハ中路兵站軍医部長ヲ命セラレ明二十九日東京出發依テ同官ニ左ノ如ク訓示ス

一、一般職務ハ戦時衛生勤務令兵站部ノ衛生勤務ニ準拠スヘキコト

一、此後後備大隊ヲ派遣シ兵站沿道ヲ守備セシメラル可キニ付此大隊ニ付スル医官ニハ兵站軍医ノ事務ヲ兼掌セシムル事

一、釜山ニ兵站病院ヲ開ク場合ニ際シ赤十字社救護員派遣ヲ適當ト認ムルトキハ早々可被申出事」。

石黒長官の訓示は以下七項目にわたって続く。石黒長官の訓示が先ず準拠すべきものとしてゐる「戦時衛生勤務令」は戦時に於ける衛生勤務の細則を定めた衛生部員必携の書冊だ。当時の「勤務令」は日清戦争開戦直前の明治二十七年六月十日川上兵站總監制定のもので、七編八十五章五百七十四条からなる小型ながら分厚い冊子だ。鷗外の任務に直接かわる部分はその第五編「兵站部ノ衛生勤務」である。さらに石黒長官は出征軍医官、薬剤官にもれなく自ら筆記印刷した執務要領を配布していた。石黒忠恵回想録「懐旧九十年」は述べる。

「この野戦衛生長官というのは、戦役に関する陸軍衛生部の首長たる要職です。私は任命の日には帰宅せず、陸軍省の医務局に泊り直ちに筆を執って、今度出征する軍医官・薬剤官に対して、その執務の要領三十三カ条と私の方針を記し、これを印刷して配布しました。この三十三カ条でこの戦役の終了まで押し通したのです」。

野戦衛生長官部の「陣中日誌」冒頭にも掲げられている「三十三カ条」は戦場に臨む衛生部士官の心得を説いた周到厳格なもので、従軍は平素訓練研究した学術を応用する好機会だとしているあたり、軍人にして医科学者である衛生部士官の立場を明確にしている。なお「三十三

カ条」が当面の戦地韓国の状況を知る文献として特に「小池ノ著シタル鷄林医事」に言及してゐるのは注意すべきだ。日清戦争は「鷄林医事」の著者ならびにその「訳稿」の筆者の出番である。

明治二十七年九月二日、鷗外は病院船田子浦丸に搭乗して宇品を出港途中馬関に寄り三日午後から四日にかけて玄界灘を渡った。「夜風悪し客皆苦船す」が「徂征日記」の感想だ。田子浦丸は僅か七四五トン速力九ノット半の老朽船だった。どうやら無事釜山に着いたのは四日払曉午前三時である。

鷗外の残した日清戦争の記録「日清役自紀」の最初の石黒長官宛の報告「中路兵站軍医部別報第一」は釜山から九月五日に発せられたものだ。

「明治二十七年九月四日小官任地釜山ニ着シ木村軍医正ノ後ヲ襲グ是ヨリ先キ小官ハ前月二十八日ヲ以テ中路兵站軍医部長ノ辞令ヲ受ケ翌二十九日貴官ノ訓令ヲ領シ即日東京ヲ出發シ連日汽車中ニ在リ八月三十一日広島ニ抵ル徑ニ宇品ニ赴キテ山根運輸通信支部長ヲ見田子浦丸ノ明後日發スベキヲ聞ク九月二日宇品ヲ發ス三日馬関ニ小繫ス急ニ上陸シテ原田運輸通信支部長ト相見ル始テ荒木軍医ノ玆ニ在ルヲ知ル患者ノ船ヲ辞シテ此ニ留ルモノアリヤト問フ